

## 貴重書紹介 ちりめん本

井上 和人（国際文化学部教授）

金沢文庫分館所蔵の貴重書ちりめん本。ご覧になったことはありますか。2017年1月には、「金沢・鎌倉フォーラム」（国際文化学部比較文化学科主催）の第5回として「ちりめん本が結ぶ世界」も開催されました。

どんな立派な本だろう——。貴重書ときいて、そう思ったかもしれませんね。でも、実はとてもかわいらしい本なのです。タテ16センチ、ヨコ10センチ、1冊たった約25グラム。単三電池1個分の重さしかありません。ちりめん本、英語でCrepe-Paper Book。印刷の終わった和紙をプレス機で縮緬（ちりめん）のように加工した後、和綴（わとじ）製本した小型本。欧文で多色刷りの挿絵入りです。しわしわでふわふわな手ざわりが最大の特徴です。

では、1冊手にとってみましょう。表紙もかわいいですね。おばあさんとスズメたち（着物を着ています！）。タイトルは…英語です。*The Tongue cut Sparrow*とは？ そう、『舌切雀』！ 館蔵のちりめん本は英語版『日本昔噺』全20冊。ちりめん本の代表作です。明治18年（1885）に刊行が始まったこのシリーズ、館蔵の『舌切雀』は昭和15年（1940）発行第18版、50年以上刊行され続けた超ロングセラーです。出版は東京。英文ですが、日本で印刷された本にまちがいありません。『舌切雀』以外のタイトルも気になりますね。*Momotaro, or Little Peachling*、*Battle of the Monkey and the Crab*、*The Old Man Who Made the Dead Trees Blossom*。何の昔話でしょうか。答えは自分で考えましょう！

さて、金沢・鎌倉フォーラム「ちりめん本が結ぶ世界」の折には、大妻女子大学教授の榎本千賀先生

と本学非常勤講師の権田益美先生にご講演いただきました。榎本先生は本学所蔵『日本昔噺』について、大変詳しい書誌調査をしてくださいました。その結果、『日本昔噺』20冊の入っている箱は貴重な元箱であること——もともとこの箱に入って売られていたことが明らかになりました。さらに、榎本先生のお話は『日本昔噺』の挿絵から江戸の玩具、浮世絵へと広がり、幕末から明治の江戸東京の文物に目を開かせてくださいました。

また、権田先生は『日本昔噺』の翻訳者タムソン——前にあげた『舌切雀』も彼の翻訳です——にご注目。タムソンはアメリカ長老教会の宣教師。文久3年（1863）5月に来日しキリスト教教育に尽力しました。その周囲にいたのがヘボンやカロゼースといったひとびと。それから、長谷川武次郎——ちりめん本の創始者——も。武次郎はクリスチャンでタムソンの教えを受けたのでした。

1冊のちりめん本から、江戸文化に思いをはせ、キリスト教教育に尽くした先人たちの偉業をうかがうことができます。ちりめん本は海外へのお土産としても珍重されました。ちりめん本を手にした外国の子どもたちは、遠い日本にどんな思いをめぐらせたのでしょうか。かわいらしいちりめん本、実は広い広い世界と結びついているのです。

